

慢性腎疾患の診断・治療に関する研究

——研究目的・研究方法および58・59年度の研究予定について——

分担研究者 酒井 糾（北里大学腎センター）

研究協力者リスト

伊藤 克己(東京女子医大腎センター) 伊藤 拓(都立清瀬小児病院)
岡田 敏夫(富山医科薬科大小児科学教室) 北川 照男(日本大学小児科学教室)
黒田 育子(国療東松本病院小児科) 小坂橋 靖(聖マリアンナ医大小児科学教室)
堺 薫(新潟大学小児科学教室) 重松 秀一(信州大学病理学教室)
高田 恒郎(新潟県立吉田病院小児科) 武田 修明(倉敷中央病院小児科)
永田紀四郎(弘前大学小児科学教室) 服部新三郎(熊本大学小児科学教室)
藤原 芳人(小田原市民病院小児科) 牧 淳(近畿大学小児科学教室)
村上 睦美(日本医大小児科学教室) 山口 正司(国立医療センター小児科)
山下 文雄(久留米大学小児科学教室) 吉川 徳茂(神戸大学小児科学教室)
和田 博義(兵庫医大小児科学教室) 飯高喜久雄(北里大学小児科学教室)
河西 紀昭(北里大学小児科学教室)

慢性腎疾患の診断・治療に関する研究は、全国20施設の協力を得て、58・59年度のテーマを四つに絞って共同研究することとした。

対象疾患は、小児期の特殊性を考え、(1) 膜性増殖性腎炎 (MPGN)、(2) IgA 腎症 (IgA・N)、(3) 巣状糸球体硬化症 (FGS)、(4) 紫斑病性腎炎 (HSP・N) の四つとした。

(1)の MPGN については、都立清瀬小児病院腎内科の伊藤拓先生にグループ・リーダーとして研究のとりまとめをお願いした。初年度は、各施設の症例登録、病型分類そして臨床病理学的検討がなされた。

(2)の IgA・N については、神戸大学小児科の吉川徳茂先生にグループ・リーダーとして研究のとりまとめをお願いした。初年度は、神戸大学小児科および都立清瀬小児病院の症例、150例についての retrospective にその予後因子についての検討がなされた。

この二つの疾患は特に学校検尿を通して発見され、しかも比較的病初期の症例が多いので、出来れば追跡腎生検で病像の自然経過あるいは治療による修飾像についても検討し、最終的には治療法についてのガイドラインを出したいと考えている。

(3)のFGSについては、近畿大学小児科の牧 淳先生にグループ・リーダーとして研究のとりまとめをお願いした。初年度は、アンケート方式による全国調査が行われ、その集計結果が報告された。そして今年度は各研究協力者によるFGSに関連した研究をお願いした。

(4)のHSP・Nについては、北里大学小児科の河西紀昭先生にグループ・リーダーとして研究のとりまとめをお願いした。初年度は、retrospectiveな検討結果、即ち腎不全となり、死亡、あるいは透析・移植へ移行した症例についての特徴を調べた結果が報告された。本年度はアンケート方式による全国調査を行い、発症状況を調査し、病型分類そして臨床病理学的に検討された。

(3)、(4)の疾患は学校検尿による発見とは直接関係せず、むしろ医療機関で見出される疾患であるので、その頻度は医療機関によってばらつきがあり、取り扱う症例についてもその医療機関の設備状況によって重症度が異なっている。従って、この二つの疾患(3)、(4)については自由研究、つまり症例の提供は義務づけずに最初entryされた施設についてのみ研究の協力をお願いした。

一方(1)、(2)の疾患は先にも述べた如く学校検尿による発見が多く、どこの地域でも共通の問題を抱えているので、今回の共同研究にentryされた全施設に対して症例報告の義務を負って載いた。なお、病理組織については信州大学病理の重松秀一先生に一貫して見て載くこととした。